

51 年前のパルミラ

赤澤 威

Pioneer Seminar: 51 Years Ago in Palmyra

Takeru AKAZAWA

本稿は2018年12月2日(日)、サンシャインシティ文化会館にて開催された日本西アジア考古学会(古代オリエント博物館共催)パイオニアセミナー「西アジア考古学を切り開いてきた開拓者たち」の記録をもとに、編集委員会が編集したものです。

『西アジア考古学』20号編集委員会

はじめに

古代オリエント博物館および日本西アジア考古学会の新しいプログラム、パイオニアセミナーにご招待いただき、このような機会をいただいて光栄です。

演題を「51年前のパルミラ」とした意味です。私にとって初めての海外調査となったのが51年前のパルミラの地です。当時のパルミラ、そこで何をしていたのか、何をしていたのかというようなこととお話したいと思います。

まず、言っておきたいことは、私は西アジア考古学を切り開いた開拓者ではなく、むしろ素晴らしい開拓者によって敷かれたレールの恩恵に浴してきた一人であるということ、正直な気持ちです。

物事にはすべて始まりというのがありますが、今日隆盛を極めている我が国の西アジアの調査は江上波夫先生の下で62年前、1956年にスタートしたイラン・イラク調査(東京大学イラク・イラン遺跡調査団)で幕が開きます。

そして、1961年、鈴木尚先生率いる東京大学西アジア洪積世人類遺跡調査団がスタートします。鈴木先生については、我が国のネアンデルタール・ミッション、そのレールを敷いたその開拓者という意味で登場していただきます。同時に私の恩師です。

この機会に二人の先達にも触れておきたい。同時期に活躍された泉靖一先生、原寛先生です。泉先生は我が国のアンデス考古学の開拓者として、原先生はヒマラヤ植物分野の開拓者、パイオニアとして大きな業績を残された方です。

いずれにしても、海外のフィールドを専門にしている我々は、江上先生、泉先生、原先生、鈴木先生によって敷かれた海外学術調査と銘打つレールを走っているということです。私自身、間違いなくその恩恵に浴してきた一人です。この4人の先生に敬意を表したいと思います。

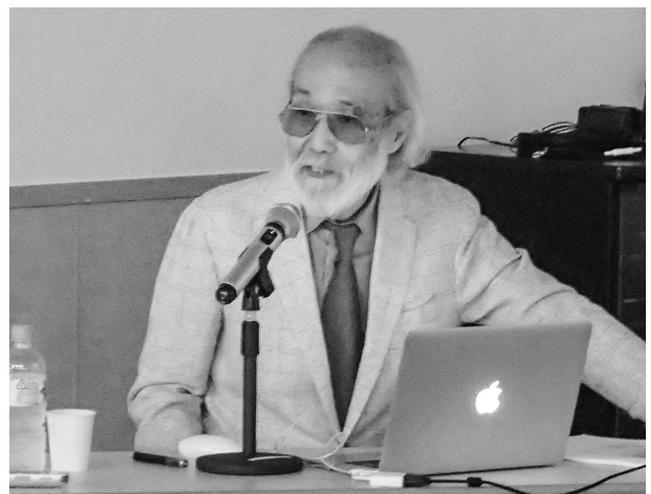
私の初めての海外調査は1967年です。5月25日、山口

県徳山港から出光石油のマンモス・タンカー日章丸13万トンで、クウェートに向けて出発しました。出港時から、調査地のレバノンとシリアー帯は雲行きが怪しく、心配しながらの出発でした。

出港して10日後、インド洋上で、日章丸の僚船でもあります同じ出光石油の出光丸、当時最大の20万トンのマンモス・タンカーと出会います。その日の夕刻でした、ニュースが飛び込みました。その後、第三次中東戦争と呼ばれることになるイスラエルとアラブ諸国の交戦というニュースでした。第三次中東戦争は、ご存知の方も多いと思いますが、開戦6日で終結し、私どもは無事クウェートから飛行機でバイルートに飛び、スタートしたわけです。

ここで紹介するのは、一緒に先発隊として出かけました木村賛さんです。私は出発直前に婚約しましたが、木村さんは、その際に証人として立ち会ってくれました。それ以来の怖いお目付です。

調査中に私がフィアンセに送った絵はがきです。今のようにはスマホがあったわけではありませんし、電話もほとんど通じませんでした。行く先々で絵はがきを買って、



それが唯一の交信手段でした。懐かしき思い出で、よく書きました。今回のために昔の野帳を調べましたところ、誰に何通の絵はがきを送ったか、記録をとっていました。

そういう状況でスタートした西アジア調査が、私の初めての海外調査です。それ以来、シリアに出かけたときには、ダマスカスにあるカシオン山という山に登り、そこからダマスカスの写真を撮ることにしていました。国立博物館、旧市街、ウマイヤド・モスクが見えます。私にとって最後のシリアになりました2011年、7年前のダマスカスです。

ちょうど1か月程前になりますけど、この国立博物館で大きな行事がありました。2011年に勃発した内戦状態の下で閉鎖されていた国立博物館が、シリアの文化省、観光省、それに国連開発計画（UNDP）が連携し、10月28日、リオープンすることになりました。この状況は日本のテレビでも放映されましたので、ご覧になった方もいると思います。シリアのテレビでもこの国立博物館のリオープンの様子を詳しく放映しました。その特番で榎原考古学研究所の西藤清秀さんが主導するパルミラの復興計画案が具体的に紹介されました。それを見ながら、日本隊の存在の大きさに感動したわけです。その道筋をつけた日本西アジア考古学会の皆さんに改めて敬意を表します。このような動きがシリアの復興に向けてのマイルストーンになることを願うばかりです。

ネアンデルタール・ミッション

さて、本題に入ります。私を育ててくれた我が国のネアンデルタール・ミッションとは何か、そのポイントについてです。

シリア、レバノン、ヨルダン、そしてイスラエル、この東地中海沿岸一帯のことをレヴァント（Levant）と称しますが、その地は南北ほぼ1000 kmにわたって走る細長い盆地と重なっています。その盆地のことを死海地溝帯と称します。この地溝帯は、アフリカ起源の初期人類がユーラシア大陸の各地、つまりヨーロッパ、アジア諸地域に移住拡散する際に通った最古の移住回廊の一つです。他にも回廊はあったかもしれませんが、主要な移住回廊です。ですから、この一帯には出アフリカを繰り返してきた初期人類が住みついた遺跡がたくさん見つかっていて、発掘されています。

ただ、この地の調査は、1930年代から主として欧米の研究者によって進められ、むしろ彼らの独壇場と言っている状況でした。そこに日本隊西アジア調査団がチャレンジしたわけです。そして今日までにイスラエルのアムッド（Amud）、レバノンのケウエ（Keoue）、シリアのドゥア

ラ（Douara）およびデデリエ（Dederiyeh）という4つの洞窟を調査してきました。この4つの洞窟は、いずれもネアンデルタール人が住みついていた証拠を留める遺跡です。日本隊のネアンデルタール・ミッションと称される由縁です。

ここで、わが国のネアンデルタール・ミッションのパイオニア、先導者を紹介しておきます。欧米の研究者の独壇場であった中東西アジア旧石器遺跡調査の世界に新しい道筋をつけた3人のパイオニアです。東京大学の人類学の教授であった鈴木尚先生、古生物学の高井冬二先生、そして考古学の渡辺仁先生です。この3人の先達は、日本人とか日本文化のルーツ、その成り立ちを探る道を極めるにはどうしても日本列島の外に出かけるしかない、外から日本を見るしかないと考え、実践したわけです。その成功によって、今日見るような活況を呈する我が国の海外学術調査のレールが敷かれることになったということです。

アムッド洞窟での発見

まず、ネアンデルタール・ミッションのスタート、起点となったイスラエルのアムッド洞窟の調査の話をいたします。

アムッド洞窟はエルサレムの北約140 kmの地点にある洞窟で、死海地溝帯にあるガリレー湖に流れ込むワディ・アムッドという涸れ沢の上流約4 kmの地点に開口する洞窟です。その傍に立っているタワー状の奇岩が、ヘブライ語でアムッドと呼ばれています。それに因んでアムッド洞窟という名前が付いたわけです。

アムッド洞窟を発見したのは渡辺仁先生で、1960年にイスラエルで洞窟遺跡の踏査をし、発見しました。洞窟の内外で発見される石器の特徴から、かつてこの洞窟にネアンデルタール人が住みついていたに間違いのないこと、更に洞窟の堆積物は十分にありそうだとということで、先生は洞窟の発掘を決心され、そして61年から始まったのが、アムッド洞窟調査です。61年、64年に調査が行われました。64年の調査には、まだ若い遠藤万里さんや木村賛さんもおられました。お二人ともその後、鈴木先生を継いで、東大の人類学教室を主宰することになるわけです。

アムッド洞窟での最大の成果は、ネアンデルタール人骨の発見です。非常に保存がよく、頭があり、右手、右足、手足が揃っています。肋骨、背骨もあります。指の骨も残っています。ネアンデルタール人の化石人骨の発見は数多いですが、これだけ部品が揃った、保存のよい化石人骨は稀です。この化石はその後詳細に研究され、様々な新事実が発表されます。

例えば、頭です。復元された脳頭蓋の容量を推定したところ、1740 cm³、現代人の我々の平均値が1400 cm³です

から、大きな頭をしていたこととなります。今日まで発見されている多くの化石人骨の中で最大級の頭を持っていたのが、アムッドのネアンデルタール人ということになります。

更に、骨格を復元し身長を推定したところ、178 cm でした。ネアンデルタール人はもともとヨーロッパでたくさん発見されていて、低身長とされていましたが、高身長の珍しいネアンデルタール人の発見例として注目されることとなります。

そして、1970 年、調査の内容、発見物の分析結果を網羅した大部の報告書が刊行されます。鈴木先生によって見事に復元された頭蓋骨の迫力に加え、報告書の中に盛り込まれた見事な研究内容、様々な刺激的な分析結果は、化石人骨の研究の世界に大きなインパクトを与えます。いまだに評価され続けている希有な報告書の一つです。

この死海地溝帯は、旧人のネアンデルタール人と新人のサピエンスの文化の連続とか不連続とかを研究する遺跡の宝庫として、脚光を浴び続けてきました。しかも、化石人骨の数々が発見されていることもあって、人類学の研究者にとってはメッカのような調査地域ですけど、いずれも古い発見であり研究も古かった。そこにアムッドで新しい化石が発見され、しかも見事な研究報告書が刊行され、脚光を浴びたわけです。

死海地溝帯で対面するアムッド・ネアンデルタール人と新人サピエンス、というようなイメージが有名になります。この対面する新人と旧人は何を語っているのか、いったい何があったのか、こういう人類学の世界で論争の絶えない人類進化のテーマ、それを研究し具体的に論ずるには欠かせない資料として、アムッド・ネアンデルタール人は生き続けているということです。

東京大学西アジア洪積世人類遺跡調査団・第三次調査

私がこの華々しい背景を持つ調査団の隊員という幸運に恵まれたのは、1967 年、51 年前のことです。正式名称は東京大学西アジア洪積世人類遺跡調査団、第三次調査です。

レバノンのバイルートで我々がベースキャンプにしていたミルトムハウスの前では、当時 55 歳の鈴木先生、佐倉朔先生、木村先生、遠藤先生と一緒に記念写真を撮りました。更に高井先生、小堀巖先生、鈴木郁夫先生、以上が第三次調査の陣容です。

この第三次調査、私が初めて経験した海外調査の目的は、単純明快でした。ネアンデルタール人が見つかったアムッド洞窟に相当するような洞窟遺跡を見つけること、すなわち、アムッド人骨のような化石に出会える洞窟を見つけることでした。

なぜイスラエルではなく、イスラエルと対立するアラブ

世界、レバノンとシリアに転戦したかということですが、別にイスラエルと喧嘩したわけではありません。イスラエルではたくさん化石が見つっていますが、その北のレバノン、シリア、トルコでは化石人骨は見つかりませんでした。その地で、新しい化石を発見しようということで計画されたのが第三次調査です。

調査地域は、地形図とか地質図を頼りにして特定する計画でしたが、詳細な地図が入手できず困ったことを思い出します。そこで、洞窟の発達が期待されるのは石灰岩地帯ですから、石灰岩性の山塊が分布する地域をさまざまな情報から探し出し、乗り込む地域を絞り込むという計画をたてました。

そしてターゲットとした地域が、シリアの北東部にあるハッサケ近くのアブド・エル・アジズ (Abd el-Aziz)、ユーフラテス河沿いのエル・コウム (El-Kowm)、パルミラ盆地 (Palmyra Basin)、オロンテス河 (Orontes)、マールーラ (Maaloula)、ダマスカスの周辺です。それとレバノン。すべて石灰岩地帯で、崖が発達している地域です。

アブド・エル・アジズ

本命視していたパルミラ調査に先だって、シリアの北東のハッサケのアジズ山塊に手をつけることにしました。パルミラ国立博物館の館長ハーレド・アサード (K. al-Asaad) さんが立てた計画のもとパルミラを出発しました。まだハイウェイはありませんでした、日本から持参した日産パトロールで道なき道、沙漠を横断してユーフラテスを目にした時の感激は忘れられません。その河畔のレストランで、アサードさん、小堀巖先生、鈴木郁夫さん、道案内役のベドウィン、レバノン・バイルート以来の運転手と乾杯。

このアジズで調査に先立って楽しい洗礼を受けました。この一帯で最大の部族の族長に招待され、御馳走になりました。アサード館長が主賓です。大いに歓待を受けました。今でも思い出します。非常に暑い所で喉が渇く。今日は飲めるなど楽しみに出かけたのですが、酒は出ませんでした。ご飯の上にはヒツジの頭が載っています。族長が目玉をほじくり出し、「これを食べろ」とばかりに差し出され、食べた、というより一気に飲み込んだことを覚えています。

アジズ調査、実際どういうことをやるかといいますと、谷に入って、ただただ歩いて、歩いて、洞窟を探すわけです。洞窟が見つかりましたら、その洞窟がかつて人の住みついてた遺跡であるかどうか、その証拠を探すわけです。旧石器時代の遺跡調査でしたから、だいたい石器が証拠になります。見つければ、そのツラを読んで、その製作者、洞窟に住みついてた人がいつ頃の時代の人であった

のか、推定するという作業を繰り返すわけです。

アジズー帯で洞窟遺跡を見つけることができました。同時に、アサード館長によればローマ時代というシタデル(城塞)にもよく出くわしました。アサード館長はむしろこちらに非常に興味がありまして、見つかるたびに記録して、シリアの新聞に投稿しておりました。

この一帯の調査で私たちが有望と考えたのは二つの洞窟、ハズネ(Khazne) IとハズネIIです。その理由は、洞窟の内外の表面に落ちていた石器です。その中にネアンデルタール人が作ったと思われる、いわゆるムステリアンと呼ぶタイプの石器が混ざっていました。ということで、この二つの洞窟はおそらく、かつてネアンデルタール人が住みついていたのであろうということで、有望遺跡として登録したわけでありました。

この二つの洞窟を見つけ、石器からネアンデルタール人の遺跡と分かった時には、ほっとしました。嬉しかったです。

パルミラの歴史

アジズの調査を終えた後、本命のパルミラに入りました。

そのとき、初めて見たパルミラの遺跡には、ベルの神殿、列柱道路などとともに、エフカの泉(Ain Efca)がありました。このエフカの泉はその後整備され、様変わりします。更に、この一帯に巨大なホテル、メリディアンが建ちまして、エフカの泉はホテルの中に消えてしまいました。

これは私の宝物の一つです。1967年、アサードさんからプレゼントされたパルミラのベルの神殿の写真です。この写真を前にして、アサードさん、現在のパルミラの誕生に至った経緯を話してくれました。

アサードさんは、考古学者として、パルミラの博物館の館長として、日本隊を含む多くの海外調査団を支援して、パルミラの遺跡の復元復活に生涯を捧げた方でした。2015年に亡くなりました。83年の生涯でした。そのアサードさんから聴いたパルミラの歴史です。

アサードさんからいただいた写真ではなく、複写でもありませんが、パルミラの古い写真を収録する出版物が2001年に刊行されましたので、その複写写真を見ていただきましょう(編集註:写真は割愛させていただきました)。

これは1927年ですから、91年前のパルミラです。この部分がベルの神殿です。ご覧のようにベルの神殿内は往時の地域住民の住居で埋まっております。埋め尽くされているのでしょうか。これは上から見た写真です。ベルの神殿の内外が、住民の住居で埋め尽くされています。

これは1929年の写真です。先ほど見ていただいた2年後ですね。そしてその翌年、1930年の写真です。ご覧の

ようにこの部分から住居が消えています。更に残っている住居も、このように屋根が無くなっています。既に壊されている様子やだんだんと神殿内の掃除が進んでいる状況が分かります。4年後の1934年の写真では、住民住居は完全に神殿内から消えています。ただ、周りにはまだ住民の住居は残っていますけれども。

そして、これがアサードさんからプレゼントされた写真です。ご覧のように神殿の内外、完全に整備されています。ここで見ておいていただきたいものはこの部分です。この遺跡の内外、神殿の内外に住みついていた人たちは移住したわけですが、実は彼らのためにこういう新しい町が造られたわけです。これが最初に紹介した現在のパルミラの前身になった町並みです。

これは1937年でありますから81年前です。私の生まれる前の年です。ベルの神殿、凱旋門、パールシャミン神殿が見えます。これは墳墓の谷です。

さて、シリアの情勢がメディアに登場しない日がないといってもいい状況が続いていますが、現在のパルミラも、しばしば登場しています。今見ていただいているのが、私にとっては最後のパルミラ、2009年です。これは私が撮った写真ではありません。

2015年、パルミラに侵攻してきたイスラム過激派組織ISによって起こった悲劇、惨劇を伝えるニュースに際して使われた写真のコピーです。パルミラを代表する建造物、パール神殿、凱旋門、ベル神殿などがつぎつぎ破壊されます。彼らと政府軍との交戦によって、パルミラ遺跡の発見物の宝庫だった博物館も被災します。

ちなみに、パルミラといいますが、ご覧になった方は多いと思いますが、1984年だったでしょうか、NHKのスペシャル番組「シルクロード」を思い出します。最近再放送されましたが、その素晴らしさ迫力に改めて見入りました。あれだけのものをその後見ていないように思います。昔のディレクターは、すごかったと思いますね。と同時に記録映像の価値、その存在感の大きさを改めて感じました。

パルミラ盆地の洞窟遺跡

さて、堅い話となります。洞窟探しの本命と考えておりましたパルミラ盆地で、旧石器時代の遺跡を見つけるという本来の調査の話に入ります。このパルミラ一帯の調査には、アサード館長が時間の許す限り同行してくれました。

パルミラを有望視していたのは、この一帯で既に有名な遺跡が見つかったからです。カールトン・クーン(C. Coon)というアメリカの人類学者が洞窟を発掘しています。ネアンデルタール人の作品である石器が見つかる洞窟遺跡ジェルフ・アジュラ(Jerf Ajla)です。当然この一帯で似たような洞窟が見つかるだろうと期待して乗り

込んだわけです。

アジズの場合と同じで、こういうパルミラ盆地を見下ろすように発達する山塊に入って、谷筋を歩いて、洞窟を見つけるという作業の繰り返しです。アブ・タファト (Abou Tafat) という洞窟では、たくさんの石器を採集し、これが遺跡であることを確認しました。ドゥアラ II という洞窟の周辺、ボイレ (Boireh) という洞窟でも石器を採集しました。その中には、ネアンデルタール人が作ったと思われる石器がいくつか入っていました。そして、最終的に 45 の洞窟遺跡をこの一帯で見つけ、記録しました。

面白い洞窟も幾つかありました。ほとんどは 1 階建てなのですが、2 階建て、3 階建ての洞窟もありました。これらの洞窟は全部使われていました。おそらく雨季の間、遊牧民が家畜小屋として。その際に、多くの場合、洞窟の堆積物を掻き出していました。ですから、洞窟の内外には石器が散乱していました。洞窟が遺跡かどうか、いつ頃のヒトが住み着いていたのかを、掘らなくとも分かるということ。最終的に 45 の洞窟遺跡をこの一帯で見つけ、記録しました。

調査報告書

そして、私どもは、この第三次調査における遺跡踏査の記録を 1970 年、報告書という形で公表しました。この報告書の中で有望な遺跡として記録した洞窟が二つあります。

一つがシリア、パルミラで見つけたドゥアラ洞窟です。巨大洞窟で、70 年、74 年、84 年の 3 回発掘しました。

もう一つがレバノンで見つけたこのケウエ洞窟です。これは 70 年に発掘し、ネアンデルタール人が住みついていた洞窟であることを確認しています。発掘中には、たくさんのお客さんがやってきました。アラブ世界とは敵対関係にあるイスラエルのアムッド洞窟で大発見をした日本隊がなんと、レバノンにやってきて発掘をしているらしいということが話題になったのだらうと思います。相次いで大御所がやってきました。

イラクのシャニダール洞窟を発掘し、ネアンデルタール人をたくさん見つけたコロンビア大学のラルフ・ソレッキ (R. Solecki) 夫妻、レバノン・ベイルートのサン・ジョセフ大学の教授パール (フランシス)・ウール (F. Hours) さん、ロンドン大学のロレーヌ・コーブランド (L. Copeland) さん、レバノン考古総局の発掘局長、ロジャー・サイダ (R. Saidah) さん。こういう人たちが尋ねてきました。海外調査の醍醐味、その一面を実感したことを懐かしく思い出します。

ドゥアラ洞窟の発掘調査

さて、ドゥアラ洞窟の話に移ります。パルミラで発見し

た最大の洞窟です。洞窟を取り巻く自然、荒涼たる世界です。洞窟が開口しておりますドゥアラの山塊を見ますと、土壌は完全に流失して完全な禿げ山です。木一本生えておりません。洞窟の前方は南に向いていますけれども、乾燥地がアラビア半島まで続くわけです。旧石器時代、ヒトが住み着いていた当時の自然環境はどうだったのかという疑問が、当然湧いてきたわけです。当時の自然は今日と違っていたに相違ないだろう。ドゥアラの調査で大きな研究目的になりました。

その前に 74 年の調査で面白いものに出会います。この洞窟のあるドゥアラ山塊の裏山は、見たことはありませんが月のクレーターのような姿をしています。ドゥアラ盆地と称しますが、この中で驚くべき光景を目にします。石器が原です。次々と見つかりました。この石器が原の傍には必ず、フリントという石器の原石の露頭が見つかりました。実は、石器が原、石器時代の石器工場の跡だったのです。このドゥアラ盆地にはいろんな時代の石器工場があったということがわかりました。

この洞窟で見つかった他の証拠です。巨大な炉址が見つかりました。炉を発掘し、厚い灰の堆積を見つけました。それに混ざって、さまざまな動物の化石が見つかりました。さらにこのような炭化した植物の化石も大量に見つかりました。どう考えても、こういう動物の種類内容、植物化石の種類内容の由来が説明つかないわけです。

動物化石の種類・内容、遺跡の住人が何を食べていたか、何を捕っていたかということ、イギリスの動物考古学者セバスチャン・ペイン (S. Payne) さんが詳細に研究してくれました。

見つかった動物の化石から同定された動物種は、コウモリ、ネズミ類、ジャンピングラビット、これらは全て小動物であります。こういう動物の化石が洞窟の堆積物から見つかったということです。ということは、この洞窟の周辺にこれらが生息していたと考えることになります。それから、ハイエナ、ウサギ、キツネ、イヌ科類、ガゼル、野生のウマ、野生のヤギ・ヒツジの類、ラクダ、ライオン。より大きな大型の草食獣だけでなく、肉食獣もいます。こういう大型の草食獣、肉食獣の骨がたくさん見つかりました。ということは、洞窟の住人の主要な獲物だったということになります。洞窟の周辺に生息していたということになりますが、現在の植生環境からしてその由来は疑問です。

74 年のことです。洞窟のあるドゥアラ盆地の北 20 km 辺りのジェベル・ラジメイン (Jebel Rajmeim) という一帯に洞窟遺跡を探しに行きました。そうしたら偶然、びっくりする景観に出会いました。アラビア語で言うボトム、ピスタチオの原生種、野生種の疎林でした。これは野生のボトムの実で、熟しています。これには驚きました。そし

て、この疎林との出会いが契機となって一つの仮説モデルが生まれることになりました。

現在、このボトム疎林が存在するのは標高1000m以上の山地ですが、おそらく過去にはこういう疎林が洞窟一帯にも存在したのだろうという仮説モデルです。そう考えますと、他の自然も、植生環境も当然違うわけです。洞窟で同定された、あのさまざまな草食獣の存在は説明がつくというモデルです。もちろん、洞窟でライオンの骨が見つかったということが、草食獣の存在を裏付ける傍証になります。

古パルミラ湖

さて、もう一つ、この一帯で我々が自然の環境を復元するための大きな成果が上がったのが、洞窟の南方の一帯で、サブハと称す湿地帯の調査です。衛星写真を見ますと、パルミラ盆地の中央部に薄く水色がかった部分があります。それがサブハ・ムー (Sabkhet Mouh) と呼ばれる湿地帯です。塩湖となっていて、塩を作っています。洞窟からこの一帯までだいたい20kmあります。

74年シーズン、このサブハ一帯の地形調査をした自然地理学者・阪口豊先生から興味深い仮説モデルが提唱されます。洞窟の前方には、かつて巨大な湖が存在したのだと。その痕跡が、サブハという形で湿地帯として残っているのだと。さらに、サブハ一帯の随所に湖岸段丘が存在すると。湖、間違いなく存在したと。

84年シーズン、この沙漠に消えた湖「古パルミラ湖」、すなわち阪口仮説を検証するために、より直裁的な証拠を得るために井戸掘り機を登場させました。今にも崩れそうなトラックですけれども、ヒツジやヤギの飲料水の水源をみつけようとパルミラ盆地一帯を走り回っている果敢な井戸掘りトラックです。その井戸掘りトラックが積んでいるボーリングを使って、サブハの地下を探ってみよう。このサブハがかつて湖だったという直裁的な証拠を見つけようという計画をしたのが、1984年です。湖であったとすれば湖成堆積物が見つかるはずであるということです。成功しました。湖成堆積物が見つかったわけです。

阪口先生は掘り出したボーリング資料を分析・解析し、年代を測定した上で、間違いなくこのサブハの地下には湖成堆積物が存在するという確証を得たわけです。これが阪口仮説のモデルで、だいたい4、5万年前のことですけれども、最大時の湖水、標高400mの等高線で閉じる範囲まで拡大していたという仮説です。巨大です。サイズを計算したところ、長径東西約65km、幅南北約30kmの巨大湖です。ほぼ琵琶湖と変わらない大きさです。形まで似ています。

ところで、74年、それまで見たことのない光景に出会

いました。水をたたえたサブハです。まさに湖です。何度もパルミラ調査に行きましたけれども、湖水を見たのははじめてでした。どういうことかといいますと、この一帯は10月から2月くらいまで雨期です。降雨量が多ければサブハの湿地帯には水が溜まりますけれども、3、4月以降の乾期に干上がってしまいます。ですから、7月頃に出かける私たちは目にするのはなかったということです。この74年だけ7月に我々が訪ねていった時、まだ残っていたわけです。前年の雨季は、大量に雨が降ったということを知りました。

いずれにしても、かつてこの一帯に恒常的にそのような景観が存在していたということ、それが阪口仮説で、シリア沙漠に消えた「古パルミラ湖」と称する仮説モデルです。スヴェン・ヘディン (S. Hedin) の彷徨える湖ロプノールはタクラマカン沙漠に消えた湖の話ですが、こちらはシリア沙漠に消えた湖の話です。

この仮説は大変に評判をとり、有名になりました。仮説を収録した報告書、刊行されると、あっという間に絶版になりました。我々の世界の報告書が絶版になるなんてことは珍しく、それだけ注目され、シリアをフィールドとする欧米の研究者に大きなインパクトを与えたということです。

その一人、スイス・バーゼル大学の考古学者テンソレル (J.-M. Le Tensorer) さんが、パルミラの100kmぐらい東北にあるエル・コウム盆地で大調査を行います。まさにドゥアラ洞窟で行ったような調査を敢行します。シリアで初めてのエレクトスの化石が見つかるとか、巨大なラクダの骨が見つかったりと大きな発見もありましたが、同時にパルミラ盆地に消えた湖と同じような証拠を見つけ、往時のエル・コウム盆地一帯を自然に恵まれた緑豊かな地であったと想像するイメージ図を描き発表します。このように、日本隊のネアンデルタール・ミッションが国際舞台で評価され、欧米の研究者に大きな影響を与えた具体例の一つです。

おわりに

ネアンデルタール・ミッションは4つの洞窟を発掘してきました。イスラエルのアムッド洞窟、パルミラのドゥアラ洞窟に焦点当ててお話ししてきました。紹介できなかった洞窟を含めてミッションをまとめてみます。

4つの洞窟の存続年代は違いますが、合体すると前期旧石器から晩期旧石器まで、後期旧石器を除くほとんど全ての時代の石器文化が見つかっています。ということは、ネアンデルタール人と新人ホモサピエンスの生存期間と完全に重なっているということです。そして、アムッド洞窟、デデリエ洞窟ではネアンデルタール人骨も見つかっています。

人骨は見つかっていなくとも、石器文化から考えるかぎり、ネアンデルタール・ミッションの4つの洞窟は、レヴァント一帯の過去30万年の人類史のほとんどをカバーしています。死海地溝一帯にかつて生存していた初期人類、ネアンデルタール人と新人サピエンスの間でいったい何があったのか、その真相、いまだに人類史の世界でもっともホットな話題の一つですが、それを解き明かす上で有用な最新のデータが見つかっているということになります。

言い替えば、西アジア一帯を舞台にした人類史、なかでも現代人起源論争となると、日本隊のネアンデルタール・ミッションの成果に触れずには語れない状況です。その意味で考えなければならないこと、最後に一言付け加えたいことがあります。それは蓄積してきた遺跡遺物の行く末です。中東に限りません、フィールド研究者皆さんに問われているテーマではないでしょうか。

海外をフィールドとする我々は現地との連携、チームづくりには気を配ります。私なりに取り組んだつもりですが、分かっていたなかったと感じています。私のチームづくり、それは現地研究者、研究者とまりであったということです。地域社会住民を加えたチーム組織を考えたことは一度もありませんでした。長いシリア調査でありながら一度も考えませんでした。

ところが、今シリアで起きている状況、伝えられる文化

遺産の被災、その被災した文化遺産の修復復興、文化遺産の保全と被災文化遺産の復興が叫ばれる今日ですが、それは究極的には、地域社会・住民の理解と彼らとの連携なくしては達成できないと考えています。遅すぎました、という思いですが。

地域社会との付き合いは、発掘遺跡を決めた時から始めなければなりません。私はできませんでした。

我々は何者、ここで何をするつもりか、それがどのような意味があるか、それが皆さんにとってどのような意味があり、いかに楽しいことか、その上で、作業・研究の詳細、それがいかに難しいものか、そして、一緒に汗をかけばボーナスを手にしますよと。その上でさらに熱く語るべきです。遺跡遺物の保存保全とそれを恒久的に確保する装置となる遺跡博物館構想、それが皆さんにとっていかに大事かを語り、それを一緒に汗を流しましょうよと。繰り返しますが、海外調査、当該地域社会との協働、それはうわべではない、一緒に汗を流すものでなければなりません。

これからの海外調査、このような道筋のもとに計画してもらいたい。長い海外調査から学びました。生まれ変わってチャレンジしたい。

以上です。有難うございました。

赤澤 威

Takeru AKAZAWA

国際日本文化研究センター／高知工科大学 名誉教授

Professor Emeritus,

International Research Center for Japanese Studies/

Kochi University of Technology

